

二十一世紀の仏教と私の役割

東北大学印度学仏教史学科研究生 権

来順

(韓国)

韓国人の私は、現在仙台に住んでいます。仙台の一禅寺で坐禅もしています。東北大学では、学問としての仏教を学びつつ、苦しいけれども充実した毎日をおくっています。私は将来仏教經典を、梵語原典から韓国の言葉でわかりやすく翻訳して、仏教を母国にもっと広めたいという夢もっています。そのために私は日本に来ました。仏教原典を日常的なハンゲル語に翻訳するためには、漢文からではなく、梵語・西蔵

語に基づいて翻訳する必要がありますが、韓国では、梵語・西蔵語による仏教研究はあまりなされていないので、それらの研究の進んだ日本に留学したのです。

私は出家しておりませんが、仏教は私のすべです。少女の頃から、私は仏教とともにありました。私には、世俗的な生活にはなじめないものがあり、山や河や山寺、そこでの僧侶たちの生活に憧れをもっていました。韓国にいた時



は、山の色とよく似合った、僧侶たちの灰色の僧服に惹かれて、山寺を尋ねていきました。いつものまにか、私の友人は出家僧ばかりになっていました。私は、世俗の人たちと一緒にいるよりも、尼僧たちと一緒にいる時の方が、息がつけるような気がしたのです。その頃から、仏教は私の生活の中心になり、心の頼りになりました。姉が猛反対したため、私は尼になりません

でしたが、かといって俗に生きることも私には出来ず、そのため僧でもなく俗でもない、その中間の生き方としての、仏教学をこころざす者になって、仏教を学んでそれを広めてゆくということを、私の人生の目標であると思うようになりました。

私の生まれた時から日本に留学するまでの、これまでの生と仏教徒の縁を、もう少し詳しく述べてみたいと思います。

物心ついた頃から、私の母は私たち姉妹に、後姿の状態で、「お前たちは皆、仏様にお祈りして得られた娘たちだ」と、繰り返して愚痴をこぼしておりました。この母の言葉にはじつは皮肉がこめられています。母は、本当は男の子が欲しくて仏様に祈ったのです。ところが、仏様が授けてくれたのは、みな娘であったというわけです。

私の母は、伝統的な儒家の家風がまだ強く残

っている「権家」の宗孫の頭の家に嫁いたので、その母にとって、儒家の七去之悪の中でも最も重いとされる、代を継ぐ息子が産めないということとは、一生の大きな苦しみでした。そのため、母は息子を得たいとの一念で、山神閣の七星前と仏前に、浄水を上げて祈ったのでしたが、そのお祈りが少し不純であったためかもしませんが、結果として女ばかりが四人も生まれてきたわけです。漢学者だった祖父は、私が生まれる前に死にましたが、特に儒教的な觀念が強い人で、直子孫を望んでいたと聞きます。代を継ぐ息子を産めなかつた嫁としての罪悪感にいつも苦しんでいた母の姿を想うたびに、韓国人の心に潜んでいる「恨」（この言葉は日本語の恨むという意味ではなく、忍ぶという意味が強い）というものが、その後姿にはつきりと表れていたように思われなりません。

その母は、私が小学校の四年生の十一月に、

登校する私に朝の挨拶をしたのを最後に二度と会えぬ人となりました。高血圧のため急に倒れた母は、意識不明のまま病院に行く途中で、四十九年の生涯を閉じました。韓国の伝統的風習として、家の外で息を引き取った場合、その死体を家に持ち込んでならなかったため、母は病院から直ちに火葬場に送られて焼かれました。

母の突然の死は堪えられないほどのショックでした。母の死によって、私は初めて「無常」ということを意識するようになりました。火葬場の煙突から立ち昇る黒い煙を見、焼かれて出てきた母の遺骨を見、父がぐずれて遺骨の前に伏すのを見た時、「死」ということがどういうことか、子供の私にもわかつたのです。

儒教の伝統の下で責めを耐え忍びながら生きた母の生と、その悲しい死は、私がのちに仏教に生きるようになるための、遠い原因になっているように思われてなりません。母は、自分の

死で、仏教と私の縁を結んでくれたのかもしれない。

その後、仏教との縁が再び深まったのは大学の時です。心の余裕がない、猛烈な入試競争をくぐり抜けて、やっと大学の家庭管理科という学科に入ったものの、そこで行われる授業にまったく興味をもつことができず、私は脱け殻のようになっていました。「なぜ私はこのようなことをしているのか」という疑問をいつも自分にぶつけました。そして、大学二年の秋ついに自己への疑いに耐えきれなくなりました。講義室に向かう途中から踵を返しました。バスに乗って大邱市から同華寺へ行きました。同華寺は山の中にあり、冷たい溪流を見下ろしながら紅葉を抜けて行くと、静かに本堂が建っているのが見えました。しかしお寺に着いても自分の心をどうしてよいかわからず、虚しさを抱いたまま帰宅しました。

その後、学校に行かなくなり、部屋に閉じこもったままの日がづききました。もう何にも関心が持てなくなり、体も衰弱してゆく私を心配して、ふだんは仏教の行事に関心のない姉が、私のために「放生会」を行ってくれました。その放生会には、亀が放生されました。姉は、亀の背中に私の名前を書いて、それを海に放ってくれました。

心配そうな姉の顔を見て、自分ひとりで悩んでいてはならない、なんとか自分の足でたたくてはならないと思いました。

私は大邱にある八空山の巨大な石仏の許へ行きました。その露天の石仏は、慈悲にみちた微笑をもって、私の迷いのすべてを受け止めてあげると言っているかのようにでした。私は石仏の足元で、夜を徹して三千拜の五体投地をしました。流れる汗を全身に感じながら浄化されてゆく喜びを味わいました。夜が明けた時、自分が

生まれ変わったような感じがしました。

新しい生活がはじまりました。お寺に参禅に通いはじめました。大学の専攻も哲学科に変えました。あらゆるものに、愛情をもつようによろ。人間の悲しさを、痛みを、愛を、離別を、そして生を抱きしめて生きよう。そう、新しい生活をはじめるとあたって心に誓いました。

大学を卒業するときに、友人になった尼僧から出家するように勧められました。そこで、もう一度私は迷いにくつかりました。なぜなら、私自身以上に私を愛してくれた姉、その姉が猛烈に私が出家することに反対したからです。姉は、「仏教を勉強したいならば、自分が学費を援助し続けてあげる。しかし、出家してお寺に入ってしまうことはしないように」と言い、出家することよりも仏教を研究することを勧めたのです。姉が反対した理由は、韓国の尼寺は戒律が非常に厳しいため、私が肉親に会えなくなる

ことを恐れたためです。私は人生の岐路に立ち悩みましたが、ついに姉の勧めに従い、出家することよりも、仏教を勉強する道を選び、日本に留学することに決めました。仏教を勉強して、經典を翻訳し、経論をわかりやすく解説して、仏教の宣布に努めることも、やはり仏陀の恩に報いる行の一つであると思ったからです。

留学を決めて、参禅に通っていたお寺のお坊さんにその決意を話したら、そのお坊さんは「真に仏教を知りたいと思うなら、知識欲を含む、すべての私を捨てて、その場で坐りなさい。坐禅だけをしなさい。」と言われました。そして「留学はやめるように、出家するように」と私を叱りました。私は「出家は大事です。しかし、大乘仏教を学問として学ぶことの大事さを感じていますので、出家したつもりで、僧が修行する心構えて、学問に専念してみたい」と答えました。すると、お坊さんは「そのような覚悟がで

きているのなら、やってみるがよい」と私に同意してくださいました。

現在韓国では、次第にキリスト教人口が増える一方で、仏教人口が減っています。その結果、仏教人口は六十パーセント弱にまで落ち込んでしまいました。これは仏教者にとって反省すべきことです。民衆的な生活仏教が、僧堂の仏教と乖離してしまっています。もつと民衆に仏教を正しく理解してもらおうという積極的な努力が必要なのです。もつと仏教を広めるためには、民衆には読めない漢文經典よりも、その漢文の

元になった經典の原典を、よりやさしい現代の日常語に訳して、それを理解してもらうことが必要であるかと思えます。その訳經の試みが、韓国では足りません。なぜなら、韓国の仏教学は、まだ漢文の域を出ていないからです。私はこの点で、二十一世紀の韓国仏教に、私の研究が少しでも役に立てたらと思っています。

日本に来て、研究者としてどこまでやっているか不安ですが、ただいつも仏様の教えどおりに生きて行きたいと願っております。

